

巻頭言	同窓会は誰のためのものか	岩崎勝彦	4
特集 1	「中期経営計画」の達成を確実にするために — 実施3年目の中間年を迎えて	内田茂男	5
特集 2	千葉商科大学の教育理念と教育改革の基本方針 千葉商科大学の3つのポリシーについて	鈴木春二	12
特集 3	千葉商科大学創立90周年に向けて(第2回) 鴨専・商大と友	矢坂新一	22
活躍する卒業生	空手道 我が人生	野口正行	27
	本部からの報告 定期総会およびホームカミングデーのご案内 各委員会情報(主たる項目) 支部長会からの連絡 教育研究会活動報告	広報・IT委員会	29
同窓会活動	支部からの報告 同期会からの報告 OB会からの報告 同窓生寄稿 中国語のすすめ 卒業生のお宿・お店紹介「八戸グランドホテル」	瀧野瀬泰三 長沼弘次	31 30 29 29 29 29
随筆	茶道の裏表 Laugh it away!	吉田仙紀(紀子) 会シクルハート	48 49
CUC経営者会議	CUC経営者会議第2回総会を開催		51

教育後援会活動

教育後援会の活動
教育後援会役員会報告
千葉商科大学教育後援会新会員歓迎会の開催

小林 正興

61 57 56

CUCの教育

ソーシャルビジネスを学ぶ ― 人間社会学部

ゼミ紹介

夢を実現する力を養う

棚沢 順

63

■ ニュース・イベント

2大会連続!「瑞穂会」が

全国大学対抗簿記大会団体戦で1位、2位を独占!

本学ボウリング部が第55回関東学生春季リーグ戦1部で優勝!

商経学部1年片見公亮さんが、テニス卓球インドネシアオープンで金メダル!!

学生ベンチャー食堂新規経営者を決定!

学内市場調査を基にした丼物食堂「満腹ダイニング」で顧客満足の向上をめざす

「The University HUB」2016年10月オープン

■ メディアで紹介されたCUCの報道一覧

■ 国際センターニュース

グローバル化に先駆ける千葉商科大学

高橋 百合子

73 73

■ キャリア支援センターニュース

ミスマッチの解消とベストマッチの創造に向けて留意したいこと

川 瀬 功

77 77

■ 地域連携推進センターニュース

生涯学習、社会人教育支援事業について

地域貢献活動

82 79 79

■ 文化団体・体育会所属各部の活動状況

文化団体・体育会所属各部の活動状況

83

著 書 紹 介

『環境政策とイノベーション——高度成長期日本の硫酸酸化物対策の事例研究』

著者：伊藤 康

伊 藤 康

85

▼同窓会支部事務局一覧 86

▼編集後記 88

同窓会は誰のためのものか

岩崎 勝彦

● 千葉商科大学同窓会会長
(平19院)



まず、最近の同窓会の動きから簡単に紹介しよう。一つは、「中小企業診断士研究会」が新たに同窓会組織内の認定団体として発足した。他には教育研究会、会計人クラブなどあるが、団体は大学院商学研究科に設置された「中小企業診断士養成コース」の第5期の修了生(代表・青木靖喜さん)3名が中心になって組成された。今後の活動計画は一般中小企業へのアドバイザーは勿論、同窓会地方県支部の会員向け相談や活性化に一役買うものと期待される。

次に長年の夢であった同窓会女子会の活動の具体化である。石田まさ子さんリーダーとする千葉県支部女子会(昭50短)のメンバーが、今年の瑞穂祭では体験モノづくりコーナーを開く。子供からお年寄りまで気軽に参加できるように、牛乳パックを使った小物入れづくりを企画している。また、石田さんの協力で「J・Aいちかわ」と同窓会が協賛で新鮮な野菜・果物の販売を実施する。

以上は、同窓会の新しい動きを示すものであり、表題の「同窓会のあり方」の模索事例である。つまり、同窓会とは卒業生の憩いの場であり、旧き仲間の絆を深める機会を提供することには変わりはない。しかし、同時に次世代への橋渡しをする場でもある

ことを忘れてはならない。なぜなら、常に同窓会を取り巻く環境は変化しているのであり、その変化への対応を怠つては存続できないからである。今年度の本部活動として、会員名簿の整備を急ぎ、維持会員の増加による財政基盤の安定化に注力してきた。具体的には①会員増強を図る一方で経費を見直し②本部のみならず県支部活動の情報収集と新たな広報活動③卒業生と現役学生の繋がり場の提供や同窓会人脈の紹介、などが同窓会本来の使命と考えている。特に③に関しては、卒業生自らが現役学生の行動にもっと関心を持ち、彼等の真のニーズに添えていかねば、「上から目線の忠告」に終わってしまうのであり、いつまでたっても次世代への橋渡しはできない。繰り返しになるが、同窓会とは縦横の人脈関係を展開できる潜在的パワーを持つ組織である。会員一人ひとりが同窓会メンバーとして自覚し、活動に協力・貢献することが、同窓会を永久に不滅にする原動力となり、同時に維持会費が母校を支えるために必要な財源となっていることを今一度認識して頂きたい。誰もが、母校が潰れたり、廃れることを願っていないのはいうまでもないであろう。

千葉商大を核とした結果が、将来社会における一つの大きなパワーとして発揮できる日が必ず実現するものと信じてやまない。

空手道 我が人生

野口 正行

昭和48年3月 商経学部経済学科卒業

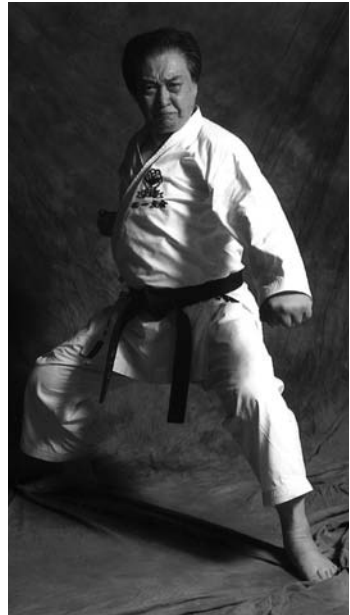
私の商大時代

昭和44年4月、千葉商科大学に入学し、同時に空手部に入部。当時の体育会は武道関係の部員数が多く、押忍の世界で上下関係が厳しい上に体育館は古い木造の講堂と兼用、部室は木造2階建てというお粗末なものでした。

また、学生寮が幾つかあり、その寮生活も上下関係が厳しく、常に緊張の毎日でした。好きで入部したとは言

え、とんでもない世界に入り込んだと思う毎日で、校庭も今と違い、1号館前にある森先生の銅像前は部活の中の練習でした。終了後はいつも銅像前に集合し、気合いを入れられて解散という毎日で、今振り返るととても良い思い出として心に残っています。

そんな中、学園紛争の波が千葉商大にも押し寄せ、ヘルメットを被った学生たちがスクラムを組み正門まで



やってきて構内へ入り込もうとしたのを体育会関係者が
団結し、バリケードを作って追い返した時、母校愛が生
まれ、千葉商大のためにといい気持ちが体育会全般に行
き渡ったと思います。

空手道一友会の設立

そして大学卒業後、空手部OBたちと何か後世に足跡
を残せないかと思いい、今から40年前の1977年に空手
道一友会を設立しました(のちに一般社団法人全日本空
手道一友会に改名)。当時、青雲の志を頂き、日本一の団
体を作ると決意し、約20名からスタート。当時未開発地
の湾岸地区に注目し、辰巳、東雲、有明、豊洲、枝川、市川、
大田区、横浜と練習場所を確保。現在、関東地区に180
カ所、約4千名の会員となり、成長し続けています。こ
れもすべて母校、千葉商大の絆があり、信頼が大きな輪
となったものであり、さらなる成長を続けていくものと
思っております。夢を追い続け、大きな目標を持ち、一つ
のことを継続し、信念をもって事に当たれば必ず道は開
けます。

今後の抱負

2020年には東京オリンピックでの空手道競技が決
まり、空手界も大きく変わろうとしている今、後輩たち
に後をお願いし、新たに全国規模の団体を立ち上げる準
備をしています。

年齢に関係なくいつまでも夢を抱き挑戦していく人生
に悔いはないと思っております、学生時代に出会った仲間た
ちと交流を続け、当時の夢や希望、思い出を語り合いな
がら進化し続ける人生でありたいものです。

